

酒 米 に 関 す る 試 験

野中和弘・中野正敏・金山 拓

(佐賀県農業試験場)

NONAKA, K., NAKANO, M. and KANAYAMA, H.
Cultivation Experiments on the rice plants for "SAKE" brewery

良質な日本酒の醸造には品質のよい秈米の使用が必要とされている。従来、酒米の品種としては主に山田錦が栽培されてきたが、佐賀県においては低収で倒伏に弱いことからほとんど栽培されていない。そこで九州農業試験場において、酒米品種として交配育成された西海134号が、生産力検定の結果有望と認められたので、この系統の収量の安定性、心白率を中心に栽培様式別、施肥法別に昭和48年度予備的に検討したのでその概要を報告する。

なお良質酒米の条件としては、古くから粒が大きく豊満で心白が中心に鮮明に出ていて、心白率が高いこととされており、栽培適地も平坦肥沃地より山麓地帯にあるとされていた。

1. 試 験 方 法

試験1 供試品種、西海134号、栽培様式、成苗移植、稚苗移植、乾田直播、移植月日、成苗6月27日、稚苗6月21日、直播5月31日(播種)、試験実施場所、佐賀農試水田、その他耕種条件は県基準に従った。

試験2 供試品種、西海134号、栽培様式、稚苗移植、試験区の構成、元肥重点施用区(A区)、穂肥重点施用区(B区)、の2区を設けた。A・B区のNトータルは14kg/10a、A区の施肥方法はNで元肥50%、中追20%、穂肥30%、実肥0%、B区はそれぞれ30%、20%、30%、20%とした。

2. 試 験 結 果 と 考 察

栽培様式間での草丈の推移は成苗が高く、茎数は稚苗、直播が多く経過した。有効茎歩合は成苗が高く、稚苗、直播は低く、なかでも直播栽培は全般的に生育量不足であった。収量は成苗が多く、直播、稚苗はやや少なかった。とくに稚苗で一穂穎花数が少なくなった。しかしm²当りの穎花数では三様式ともあまり差は認められなかった。玄米千粒重では稚苗、直播は軽く、登熟歩合では稚苗がやや低くなった。これは籾枯病の発生によるものと思われた。これらのことからa当りの収量を60kg以上確保するための条件としては、m²当り穂数350本以上、1穂穎花数65粒以上、登熟歩合90%前後、千粒重28g以上は確保する必要がある。心白率は成苗が20%、稚苗15%、直播17%で粒の肥大がよかったものが心白率も高いようであった。

次に施肥法における試験結果は下記のとおりであった。草丈の伸長は元肥重点施用区が高く、茎数でも元肥重点施用区が多く経過した。有効茎歩合は穂肥区が若干高くなり、収量はやや穂肥区が多収であった。これは穂数増によるものであり、その他1穂穎数、登熟歩合、千粒重等の差は少なく、また心白率、搗精歩留でも明瞭な差は認められなかった。

以上収量、心白率について栽培様式、施肥法をかえて検討したが、全般的に穎花数が少なく、やや少収で心白の発生率にも栽培法によって変動がみられることから、再度安定多収と良質な心白を確保する条件を究明したい。

表 1 収 量 お よ び 品 質

試 験 区 名	a 当り (kg)		玄 米 千粒重 (g)	心白率 (%)	腹 白	乳 白	搗精歩合 (%)
	精粒重	玄米重					
成 苗 移 植	72	60	28.0	20	少—中	△	91
稚 苗 移 植	69	56	27.7	15	〃	〃	90
乾 田 直 播	63	52	27.4	17	少	〃	90

表 2 収 量 構 成 要 素 と 品 質

試 験 区 名	a 当り 玄米重 (kg)	m ² 当り 穂 数	1 穂 粒 数	m ² 当り 粒 数	登 熟 歩 合 (%)	玄 米 千粒重 (g)	心白率 (%)	搗 精 歩 合 (%)	腹 白
元肥重点施用区	52	346	63	×10 ⁴ 2.2	88	27.7	14	90	少
穂肥重点施用区	55	369	63	2.3	86	27.7	15	90	〃